

『日本風土記』の表わす首里語について

望 月 真 澄

京都大学国語学国文学研究室編『全浙兵制考日本風土記』⁽⁵⁾には、安田章による解題があり、そこには本書の編者を侯継高とする浜田敦説と、それに疑念を抱く渡辺三男説とが紹介されている。また、巻四の、中でも第三十三丁表までの部分は未開拓な研究分野であることなどの指摘もなされている。小論の基づく資料はこの京大編内閣文庫本である。

この解題について、まもなく大友信一の本格的な研究『室町時代の国語音声の研究』⁽⁶⁾が登場した。その第七章で、大友は、編者については渡辺説を支持し、中国音韻学の知識をも活用して詳細な研究を展開している。

『日本風土記』研究の先駆に、有坂秀世の「唐音に反映したチ・ツの音価」⁽³⁾があるが、氏はこの書を単に日本語一般の資料と見なしている。また、浜田敦は、「国語を記載せる明代支那文献」⁽⁴⁾で、この書の音訳に用いられた支那音は、必ずしもすべてが江浙地方の音によっているものとも見受け難いと述べている。さきの大友も、現代各方言や中原音韻まで挙げながら、資料の事実を「音声」の真実にまで焦点を絞りきれなかった感があるようである。

小論は、侯継高の出身地、江蘇金山衛（江蘇省松江県）の現代音を、音韻論的に整理し、一方、『日本風土記』巻四の天文以下、第三十三表までの漢字の表わす日本語彙（寄語）のうち『沖縄語辞典』⁽⁶⁾に載る語の範囲において、その寄語に相当する現代の首里語を拾いあげた。その上で松江・首里方音を史的言語学の観点をも組み入れつつ対比したところ、この寄語が松江音をもって首里語を記載したものであるとの結論に、きわめて自然に到達し得たのである。

1 松江方音の音韻論

現代松江音の観察には、趙元任の『現代呉語

的研究』（1928）があり、近くは江蘇省和上海市方言調査指導組編の『江蘇省和上海市方言概況』⁽⁶⁾（1960）があり、特にこの『方言概況』の方は具体的な漢字とそれの音が一一記載されていて便利である。これに小論なりの音韻論的解釈を施しておくこととする。もとより音素なるものが社会習慣的に意味区別に参ずる以上、彼我の音声の単純比較の方法にとどまる限りは、言語学における定点観測は不能となり、真実をとり逃してしまう憂いがあるからである。

1:1 韻 母

『方言概況』は、松江方音の母音のまとめをして、四十五箇とし、さらに郷下音では、m・n・ŋだけで独自の音節をなすものがあると言う。しかし、このまとめは今日の構造言語学の視点からは、あまりにも未整理なものと言わざるを得ない。

もとより中国語の音韻論では、音節構造式 I M V F / $\bar{T}$ の各レベルごとに考察することが有効である。小論でも M にはゼロ・i・u・y の四種を帰納し、F にはゼロ（陰類）・N（陽類）・?（喉頭閉鎖類）の三種を帰納した上で、主要母音の整理をした。これを『方言概況』の観察結果を〔 〕に記して一覧に供すれば、

陰 類

I [ɪ]	iI [i]	uI [u]	yI [y]
e [e, ø]		ue [ue, ø]	ye [yø]
a [ɛ]	ia [iɛ]	ua [ua]	ya [ue]
ɤ [ɤ]	iɤ [iɤ]	uɤ [o]	
a [a]	ia [ia]	ua [ɔ]	ya [iɔ]

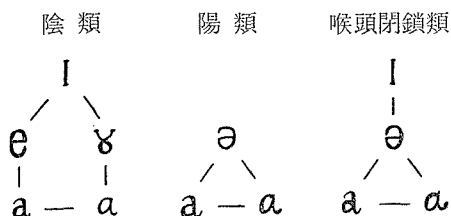
陽 類

əN [əŋ]	iəN [iŋ]	uəN [oŋ, uəŋ]	yəN [ioŋ, yŋ]
aN [ã]	iaN [iã]		
aN [ã]		uaN [uã]	

喉頭閉鎖類⁽⁸⁾

	ɿ [ɿ]		ʏ [ʏ]
ə [ə]	iə [iə]	uə [o, uə]	yə [io]
a [ɛ]	ia [iɛ]	ua [uɛ]	
a [a]	ia [ia]	ua [ɔ]	

となり、主要母音だけをとりだせば、



のようなきれいなシンメトリーを構成しているのであって、北京語の三母音



と比較するとき、北京語の陰類Fに i・u が存在する分だけ、それを欠く松江の陰類には、主要母音が多くなることによって、その欠を補い、両方音がそれぞれ体系的平衡を保っているというふうにも見ることができよう。

この結論への過程についての詳細は、別稿を設けねばならないであろうが、今は整理した各母音音素別にその中古音の⁽⁹⁾来源をたずねるにとどめ、素描を急ぎたいと思う。

陰 類

I 松江音の破擦・摩擦歯音にのみ分布する。止摂を主流とし、蟹摂祭韻・遇摂魚韻をまま含む舌上・歯頭・正歯二三等韻からのものである。

ii 山・咸摂の三四等韻と山摂二等韻の一部からのものと止摂三等韻（ただし、娘母を除く舌上音と正歯音とは含まない）からのものであり、それに蟹摂祭灰韻・仮摂麻韻三等などからのものを含む。

ui 遇摂模韻と果摂一等韻からのものが本流である。遇摂三等韻は松江音の /v/ と破擦・摩擦歯音にのみ分布し、その乙類拗音音素を声母に吸収消去するかたちであられる。

yi 遇摂三等韻からのものを主体とし、止摂乙類の合口韻からのものをも含む。

e 山摂一等韻、咸・蟹（舌頭音は合口も含む）摂の一二等韻、正歯・舌上音の山・咸摂三等韻、正歯三等音の仮摂麻韻からのものであり、止摂三等韻合口からのものを一部含む。

ue 蟹摂合口音、止摂合口音、二等韻を除く山摂合口音からのものである。

『方言概況』では [ue] と [ϕ] の二種類を観察するが、両者は中古音の来源を等しくし、舌・歯音で [ϕ]、牙喉音で [ue] という相補分布を示すので、同一音素としてよい。

ye 山摂三四等合口韻の日母・牙喉音からのもののうちで、拗音を生かす方向に音韻推移したものである。

a 山・咸・蟹摂の一二等韻と軽唇音化した山摂元韻からのものである。

その来源は、音素/e/とほぼ重なり、/a/・/e/ 合流の過渡的段階とも考えられる。ただし、/a/ には一等韻の中でも談韻が主流であることや、/e/ のように中古音の舌頭

・舌上・正齒合口音からのものを含まない点が異なる。

ia きわめて稀薄な分布しか示さない韻母である。山・咸摂二等韻の牙喉音と、四等の泥母からのもののみである。

ua これもきわめて稀薄な分布しか示さない韻母である。牙喉音の蟹摂二等合口韻からのもののみである。

ya これもきわめて稀薄な分布しか示さない。牙喉音にのみ分布する。音素 /ia/ に合口要素が加わったものである。

ɤ 流摂一等韻と 舌上・正齒・輕唇音の流摂三等韻からのものである。

iɤ 音素 / ɤ / となるもの以外の流摂三等韻からのものである。

uɤ 仮摂二等麻韻合口と 仮摂正齒・舌上の三等麻韻開口からのものである。それに蟹摂二等佳韻合口と遇摂一等模韻からのものを含む。

a 蟹・果摂一二等韻からのものである。

ia 仮摂二等の牙喉音からのものと、齒頭音と喻母の三等麻韻からのものである。

ua 効摂一二等韻と 同舌上・正齒二三等韻からのものである。

ya 効摂からのものであって音素 /ua/ とならないものである。

陽 類

əN 曾摂一等韻と 同蒸韻の正齒三等韻、臻摂の合口音からのものを主流としている。それに梗摂の二等韻、同舌上・正齒三等韻、深摂の舌上・正齒二三等韻からのものを含む。

ian 梗摂の三四等韻、曾・臻・深摂の各三等韻からのものを主流としている。

uən 『方言概況』の [uən] は臻摂合口、

[ən] は通摂を来源とする。しかし、次項同様に臻・通摂の合流が考えられよう。通摂三等韻の輕唇・正齒・舌上音からのものはこの項に含まれる。

yəN 『方言概況』は、臻摂合口三等韻からのものを [yəN]、通摂三等韻と梗摂三等

合口韻からのものを [iən] と原則的には観察している。しかし、後者の中には臻摂合口三等韻からのものの混入が見られ、この両者を同一音素とするのが妥当であろう。

aN 梗摂二等韻からのものを主流とし、同正齒・舌上音の三等韻からのものをも含む。

ian 宕摂の三等韻からのものと口蓋化する牙音二等韻からのものである。

aN 宕摂一二等韻と、齒頭音化する舌上・正齒の同二三等韻、輕唇音化する同三等韻からのものである。

uan 宕摂合口音からのものである。

喉頭閉鎖類

iI 臻摂の質韻と 山摂の薛・月・屑韻からのものであり、まゝ梗摂錫韻・深摂緝韻からのものを含む。

yI 山摂の月・屑韻の牙喉音からのもののみであり、特に牙音は口蓋化した。

ə 山・咸摂の一二等韻の一部で特に山摂一等韻と咸摂合韻からのもの、山摂三等薛韻の正齒三等・舌上三等韻からのもの、梗摂二等韻と 同正齒三等の昔韻からのもの、臻摂一等合口韻からのもの、臻・曾摂三等の正齒音からのものなどである。

iə 梗摂三四等韻、特に四等錫韻からのものは音素結合 /iI/ とともに両様が出現する。同様な現象は臻摂三等質韻からのものにも現われる。それに曾摂職韻からのものがま

ま含まれる。

uə 通摂一等韻・舌齒音の同三等韻・輕唇音の屋韻からのものを主流とし、梗摂二等麦韻合口や、宕摂一二等、曾摂一等德韻合口からのものをま含まむ。

yə 通摂三等の牙喉音からのものが主流で、わずかに梗摂三等昔韻・曾摂職韻の合口からのものを含む。

a 山・咸摂一二等韻の一部で、特に山摂二等韻と盍韻からのものを主とする。それに輕唇音の業・月韻からのものである。

ia 山・咸摂四等の一部からのもので、牙喉音のみに分布し、口蓋化がある。

ua きわめて稀薄な分布しか示さない。山摂一二等韻牙音合口からのもののみである。

a 梗摂二等と正齒三等の昔韻からのもの、宕摂の正齒三等・舌上の葉韻からのものである。

ia 宕摂三等韻の齒頭・牙喉音からのもの、同二等牙喉音からのものである

ua 宕摂一二等韻からのものが主体である。それに通摂屋韻の唇音からのもの等を含む。

以上のごとき概況を呈し、稀薄な分布を示す過渡的な段階の音素をも含みながら、ほぼ規則的な音韻推移のあとを見ることができる。

1・2 声 母

呉語の声母のきわだった特徴は中古音の濁音を脈々として今日にまで保存していることである。

また、舌上・正齒二三等音が、すべて齒頭音に合流してしまったことも特徴の一つである。

また、口蓋音化の現象は入声の二等韻の一部を除いて、牙喉音の二三四等のすべてに見られる。

また、喻・羽母が等しく喉頭摩擦有声音として現われるのは、前中古音の喻母（口蓋化する前の喻母）の姿を投げかけているように思われ貴重である。

また、音素 /v/ は奉母のほか、合口性のある疑・影・匣・喻・羽母からのものが合流し、音素 /f/ は非・敷母のほか、合口性のある曉母からのものが合流した。ここに付言すれば、

[vu] [ɦu] の間、[fu]・[hu]の間には区別がないとの『方言概況』の説明がある。

また、從・邪・牀・神・禪母と日母の一部は等しく音素 /z/ となった。日母は直音の前では /z/ となり、拗音の前では /ʎ/ となり、ままた /n/ となることもある。

また、疑母は直音の前では /ŋ/ 拗音の前では /ɲ/ となった。

子音音素を列挙すれば、

p	p'	b	m	f	v
t	t'	d	n		l
ts	ts'			s	z
k	k'	g	ŋ	h	ɦ
tɕ	tɕ'	dʑ	ɲ	ʑ	

となる。

1・3 声 調

声調は中古音との間にきわめて規則的な音韻推移が見られるが、この声調がセグメンタル・ブォーネムに与える影響は直接なく、小論の目的とするところとは今は直接関係しないのでとりあげないこととする。

2 首里語の特徴を表わす松江方言

2・1 イエ段の合流

現代首里語の特徴の筆頭にあげられるこのイ・エ段の合流は、一見して本資料にも体系的に全面的に見られるのである。

いま本土方言をカタカナで、それに当てた寄語漢字の現代松江音音素を / / で、それに相当する現代首里音を < > で示し、かつ松江音・首里音の第十六世紀の推定音には、その括弧にそれぞれ * 印を付して示すこととする。

	寄語 漢字	現代 松江音	現代 首里音	例
キ	吉	/tɕi/	<ci>	吉那 [昨日]
ケ	吉		<ki>	大吉 [ヶ]
ニ	尼	/ni/	<ni>	酷尼 [國]
ネ	尼		<ni>	拮六指尼 [鉄]
ミ	米	/mi/	<mi>	油米 [弓]
メ	米		<mi>	磨米 [皿]

以上の諸例は、今日の首里語のイエ段合流現象と同質のものが本資料にも存在することを端的にものがたっている。上記の諸例は同一の寄語漢字がイエ段を共通に表記しているものであるが、イ段と寄語漢字を共有しないエ段を表記する寄語漢字についてみても、原則として今日松江音では /i/ の類の音素を有する漢字が用いられているのである。

ところでここに一見例外と見られるものがある。すなわち、先ず

	寄語 漢字	現代 松江音	現代 首里音	例	中国語 中古音
エ	也	/ɾia/ ⁽¹⁰⁾ /ɾia/ ⁽¹¹⁾	<i>	煎那也 [雨]	jia ²
ヤ	也		<ja>	知也哥 [旧親戚]	
ヤ	耶	/ɾia/ ⁽¹⁰⁾ /ɾia/ ⁽¹¹⁾	<ja>	耶里 [鎗]	jia ²
エ	野	/ɾia/	<i>	陽豚那鳥野 [峯]	jia ²

の諸例である。ここの寄語漢字 {也} {耶} {野} は中国中古音としては同一音であるが、このようにエヤ兩様の寄語に用いられているということは、現代松江音に文言・白話で兩様の音形が併存することと共に重要なことと思われる。

伊波普猷は「琉球語の母音組織と口蓋化の法則」⁽¹⁰⁾で、西暦1500年ころの尚真を謳歌した教首のオモロには、「追手」(順風)を「おぬちへ」と書く」と指摘し、eがiに合併しながらも在来のiとの間に、なお幾分開きがあったと言っている。

また、申叔舟の『海東諸国紀』「語音翻譯」⁽¹¹⁾(弘治十四年四月二十二日、西暦1501年)には

[米]	표미 (komui), 쿤미 (komye)
[雨]	아미 (amui)
[酒]	사기 (sakui)
[金高]	나비 (nabui)
[眼]	무 (mui)
[手]	티 (ti)
[日頭]	텐다 (tyan ta)

とある。

また、上村幸雄の「琉球の方言」⁽¹⁰⁾では、「エ列」の母音は、大島、徳之島の方言で中舌母音 [ɨ] に対応する。小野津・上嘉鉄・中間など、喜界島の一部の方言でも、限られた子音に続く時は [ɨ] に対応する。ただしこの [ɨ] は小野津・上嘉鉄では岩倉市郎によると、「大島本島における i と異なり、u と i を続けて発音するような音で $\hat{u}$ に聞える」という指摘がある。

また、首里語を北京音で表記した『使琉球録一夷語夷字附』⁽¹²⁾では、

	寄語 漢字	中原音韻	例
エ	葉	/ia/	葉 [画]
テ	帖	/tia/	分帖 [筆]
メ	米	/mi/	谷米 [米]
ケ	急	/kii/	撒急 [酒]
テ	帖	/tia/	帖 [手]
ネ	聶	/nia/	聶 [鼠]

などの諸例を拾うことができる。

以上ここまでイエ段合流現象が一見体系的に見られると述べ、一方、なおかつエ也等の「例外」に拘泥しなければならないのはなぜである

うか。

問題の一つは、今日の首里語で本来のキには口蓋化が行なわれたが、本来のケにはなおその現象がないという原則があるからである。もしそれ第十六世紀末の本資料にあつてキケが全く合流してしまっているものと仮定したならば、この今日の首里語の口蓋化非口蓋化の現象を説明することはできないであろう。

要するに本資料ではキケともに中古音の牙音で表記し、その上キケ同一寄語字の表記もあるほどであるから、第十六世紀の首里語ではキにもいまだ口蓋化現象はなく、また、本来のケは限りなく本来のキに近づきながらも、意味区別の体系的作用が、キになりきることを拒否している段階であり、それがエ段の一つである「例外」エの也に端なくも表現されているということになる。

上記のように『海東諸国紀』のエ段を表わすハングルには (i)・(yə) を用いる例もあるが、

多く中舌高母音の (u) をはさみ、時には (u) すらはさんでいて、いかにも口蓋化を拒否するにふさわしい母音の状況を忠実に表わしている。しかも一方、今日、ロシア語の Mbl (われわれ) の [bl] を想起させる喜界島の [ûi] の形が存在するということである。そこで小論では以上の諸現象から推定して第十六世紀末首里語のエ段すべてに *<Ie> を再構成してみるところを提案したい。

ここにイエ段を対比させながら、首里語を表わす本資料の代表的な寄語漢字、その現代松江音、それに相当する現代首里音、同じく第十六世紀の首里推定音の順序で列挙すれば、

	寄語漢字	現代松江音	現代首里音	第十六世紀首里推定音
イ	意	/iil/	<i>	*<i>
エ(ハ)	也	/hia/	<i>	*<Ie>
キ	机	/tɕiil/	<ci>	*<ki>
ケ	潔	/tɕiil/	<ki>	*<kie>
シ	湿	/sə/	<si>	*<ʃi>

セ	設	/sə/	<si>	*<ʃie>
チ	之	/tsɪ/	<ci>	*<ʃi>
テ	的	/tiil/	<ti>	*<tie>
ニ	義	/niil/	<nii>	*<ni>
ネ	業	/niil/	<ni>	*<nie>
ヒ	許	/ɕyɪ/	<hwi>	*<hwi>
(ハ)	血	/ɕyɪ/		*<hwie>)
ミ	蜜	/miɪ/	<mi>	*<mi>
メ	眉	/miɪ/	<mi>	*<mie>
ギ	旗	/dɕiɪ/	<zi>	*<gi>
ゲ	竭	/dɕiɪ/	<zi>	*<gie>
ジ	食	/zə/	<zi>	*<zi>
ゼ	銭	/ziɪ/	<zi>	*<zie>
ヂ	池	/zi/	<zi>	*<dzi>
デ	地	/diɪ/	<di>	*<dle>
ビ	皮	/biɪ/	<bi>	*<bi>
ベ	便	/biɪ/	<bi>	*<bie>

のごとくである。

この仮説に基いて、現代松江音にあつて既に /iɪ/ になり終えたものを含め、本来のエを表わす寄語の中国中古音を改めて子細に調べなおすと、

	寄語漢字	韻攝等呼	中国語中古音
エ	也	仮攝三等馬韻	ɟia ²
(ハ、エ)	葉	咸攝三等葉韻	ɟiäp
セ	設	山攝三等薛韻	ʃiät
セ	雪	"	ʃiät
セン	仙	" 仙韻	ʃiän ¹
ネ	孽	" 薛韻	ɱiät
ネ	儼	咸攝三等儼韻	ɱiäm ²

ネ	業	〃 業韻	ngiɔp
メン	綿	山攝 三等仙韻	miän'
レ	烈	〃 薛韻	liät
ゲ	傑	〃	giät
ゲ	竭	〃	giät
ゼ	熱	〃	ñziät
ゼ	銭	〃 仙韻	dziän'
ベ	別	〃 薛韻	piät biät
ベ	便	〃 仙韻	biän'

のごとくで、中国中古音の、いずれも / a / 種の主要母音を有する山・咸・仮攝三等韻字ばかりが用いられる。これに対してイ段の場合には

	寄語漢字	韻根等呼	中国語中古音
シ	世	蟹攝 三等祭韻	siäi'
シ	石	梗攝 三等昔韻	ziäk
ニ	逆	〃 陌韻	ngiäk
ミ	明	〃 庚韻	miäng'

のごとく、たとえ同じ / a / 種の主要母音を有するときでも前舌的韻尾を有する中国中古音で表記されるものばかりである。このようなイ段を表わす寄語の例をも含めて、イ段を表わす寄語とエ段を表わすそれとの間にはいちじるしい対照を見ることができるのである。

また、シジデとともにチには中国中古音の舌上・正齒三等音字が多く用いられているのに対して、テデには舌頭音字がもっぱら用いられている点も本節の仮説をよく支持するものである。

2・2 ウオ段の合流

現代首里語にはウオ段合流の現象があるが、本資料にもそれが徹底して見られる。前節同様列挙すれば、

	寄語漢字	現代松江音	現代首里音	例
ク	過	/ku/	<ku>	過路馬〔車〕
コ	過		<ku>	過屋里〔氷〕
ス	宿	/suə/	<su>	非骨宿里〔火藥〕
ソ	宿		<su>	骨宿河潔〔浄桶〕
ヌ	奴	/nu/	<nu>	奴奴〔夏布〕
ノ	奴		<nu>	〃
フ	伏	/vuə/	<hu>	伏絲麻〔襦〕
ホ	伏		<hu>	伏西〔星〕
ム	木	/muə/	<mu>	木頼〔木寸〕
モ	木		<mu>	栢木〔雲〕

のごとく、寄語の同一漢字の松江音が、ウオ合流現象を端的にものがたっている。そしてまたこの種の同一漢字以外をもって表記する漢字の使用例にあつても、ウオ段を区別することなく現代松江音の / uɪ, uə, ua / の類が用いられるのである。

ここで注釈が必要なのはスソを表わす「宿」である。次節で述べるがスソは今日首里語の中でも、士族男子の間では区別があるというものであるが、このスソ同音例は、服部四郎が『日本語の系統』の⁽¹³⁾「琉球語と国語との音韻法則」で指摘する現象、すなわち「首里語においては内地方言のスに当る音節は古く su であつたが、su→sü→si の径路をへて si に変遷した。ただし、次の音節に u に近い母音のある時は原音 su が保たれた。」という同化作用的作用が保守的にはたらく例なのである。今その例をすべて書けば、

<nusudu> 六宿頭〔強盜〕

<kusui> 骨宿里〔藥〕

<kusuuuki> 骨宿河潔〔浄桶〕

であつて、第十六世紀首里語にもこの法則が作用していたということである。ちなみに他のスを表わす首里語に相当する寄語はすべて / si /

と表記されるのである。

2・3 スツなど

首里語のもう一つの大きな特徴は、貴族成年男子のスは<ʃi>、ツは<ʃi>、ズは<ʒi>で発音されるということであるが、本資料にあっても、その種、貴族的スツズを表記していることがわかる。

ス	四・私・絲 /sɪ/、次 /tsɪ/ → <ʃi, si>
ツ	子・止 /tsɪ/、子 /tsə/、初 /tsu/ → <ʃi>
ズ	字・士 /ZI/ → <ʒi, (zi)>
ヅ	訓・辭・自 /ZI/ → <ʒi, (zu)>

以上の挙例でわかるように中国中古音の歯頭音・正歯二等音の止摂の漢字が主であって、今日松江音の破擦・摩擦歯音の高母音となるものが多く用いられていることが注目されよう。

ここでついでに第十六世紀末首里語のサタ行のまとめを付記すれば、

sa ʃi si ʃie su

ta ʃi tsɪ tie tu

である。

2・4 濁音の処理

すでに2・1の挙例でもわかるとおり、松江音は濁音を保持しているがために、北京音で表記する場合より、よほどの便利が首里語音表記の場合に考えられる。

しかし、『海東諸国紀』のハングルが、濁音の前には、n・m・ngなどの鼻音を添え、『使琉球録』でも、n・m・ngなどの末尾韻をもつ字音を濁音の直前に用いたのと同じ処理が、本資料にあっても、全面的ではないにしろ施されているということは、たまたま同様の処理方法に従ったものか、あるいは当時、濁音の前の鼻音化現象が首里語にあったものか、考える価値のある点である。

例えば

カゼ 草熱 <kazi> [風]

の寄語漢字「熱」は中国中古音で日母の字

(nzjät)であって<zi>に用いられるのは、

その直前に鼻音化が、現実の首里語として存在することを想定してはじめて可能な表記である。

亀井孝は「ティダの語源」⁽¹⁴⁾で、2・1に挙例

の〔日頭〕 $\text{ten} \text{da}$ を

(I) [t^(h)enta]

(II) [t^(h)enda]

(III) [t^(h)eda]

のうち、一往(Ⅲ)に対応するものとして推論している。そして[da]に相当する「道」に濁音を設定することに注意深い苦渋を示しているかに見える。

現代首里語に<saataa>〔砂糖〕がある。この「糖」の中国中古音は[d'āng]、「道」

のそれは[d'āu]で、これらは外来字音であったことを忘れさせるほどの古さでなじまれているのではないだろうか。とすれば、「濁音の直前は鼻音である」という法則が民間語源説的に逆に作用し、「鼻音の直後は濁音である」ということになって

(I) t'en d'āu (中国中古音)

(II) ten tau (日本音化)

tien ta (首里音化)

(III) tien ta (首里音化)

(N) tii da (現代首里音)

というような音韻推移を推定する可能性もあるかもしれない。

ここまで『日本風土記』巻四の寄語が、第十六世紀末の首里語を当時の松江音で表記しているのではないかとの視点から首里語の特徴として考えられる二三の点に焦点を置いて論じてきた。

3 首里語を表わす松江音の問題点

3・1 ア段の表記

首里語を表記する松江音を、現代音同士、単

純に比較している限りは、そこに隔たりのある場合など直ちに他の方音に適当な音形を求めようとする欲求にかられることになる。

外見の距離は、一つには音韻論を通過しないときに生じる。首里語のア段は現代松江音の

[ɛ] /a/, [a] /a/ で表わされる。また、一つには史的観点を考慮しないときにも起る。例えば首里語のア段を表記するのに /e/ なる松江現代音が用いられるが、これを中国中古音に求めれば

[山撰一等韻] 蟹 *bān'*, 看 *kān'*, 安 *ān'*

[咸撰一等韻] 南 *nām'*, 甘 *kām'*

[蟹撰二等韻] 乃 *nai'*, 奈 *nai'*, 蓋 *kāi'*, 晒 *sai'*

[止撰三等韻] 篩 *si'*, 師 *si'*

である。

これは、1・1 陰類の項で既述のとおり、/a/ との親近性はもとより大きいのであるが、まず咸撰が山撰に合流し、蟹撰とともに前舌的な末尾音 n・i が主要母音 /a/ 種を /e/ に変化させての結果と思われる、第十六世紀末にはいまだなお /a/ のひびきを持っていたのではないかと解釈される。

また、止撰の例は頭子音が拗音を吸収しながら、そのわたり音が /a/ に発展したひびきを持っていたものであろう。

このほか、首里語の <a> を表記するものに「革」/kθ/ があるが、中国中古音で同音の「隔」は現代松江音で /ka/ でもあり、第十六世紀末には同じく */ka/ であったが、中国音韻史の中で果撰がたどった変化と同様な変化を */ka/ となったのちに経験したものであろう。

一方、宕撰一等の入声韻字「各・索・落」がそれぞれカ・サ・ラに用いられるのは末尾子音の脱落しただけの音形を保っていたからであらうし、仮撰二等韻字の「華」なども中古音の方により近いひびきを持っていた段階のものと思われる。

3・2 イ段の表記

特に首里語のシ・ジ・ヂを表記する現代松江音にはその母音を /θ/ とする中古入声音の使

用が目立つ。しかし、これらはそもそも中古音で舌上・正歯三等の声母のものであることは既に2・1でも触れたとおりである。従って、この種の第十六世紀末松江音は */i/ の要素を持つ歯ぐき音 */{ / の類の段階であったにちがいない、これが歯頭音化するにともない母音に変化を来した結果のものであろう。首里の第十六世紀末のシ・ジ音が2・1で仮説したように *<ʃi・ʒi> であれば、松江の第十六世紀末のそれらの音もこれにはなほ近いものであったであらう。

3・3 「義」の両音

「義」には現代松江音に /ɲi/ 一音しかないが、本資料では

イ 義 奴 <[?]iN> [戌], 何 義 <'wi> [咍]

ニ 義 <ni> [=]

の両音を表記するのに用いられている。ところで松江から北西へ約百キロメートルの無錫市では、この「義」に [ɲi, hi] の両音形が現代音として観察されるのである。おそらく松江にも両音形が併存した時期を想定しても不自然ではないであらう。しかし、実用的な表音効果の上ではいささか価値を損ずることはいえない。

第十五六世紀には、日本本土は九州博多、琉球は首里、明は寧波を主要な寄港地として、北京、朝鮮に及ぶ盛んな貿易活動が展開していた。この貿易の監督や、密貿易、国際紛争の取締りの必要から、中国や朝鮮で盛んな日本研究が行なわれた。それらの象徴的な事件の一つとして『日本風土記』の刊行もあつたにちがいない。従って、この著者が何者かという問題を超えて、実用の必要から、この書は単一の体系を持つ重要な外国語を、単一の体系を持つ重要な自国語で表記したいという動機に強く支えられて誕生を見たにちがいない。だからその点ではこの松江音はもう少し範囲を拡げて呉語と言いかえてよいかもしれない。

小論は、本資料が作者とされる侯繼高の出身地、松江の方音をもって当時の首里語を表記し

ているものであるとの結論に達した。たとい『日本考』に李・郝二人のサインがしてあっても、彼等の方音に基くものではない。しかし、彼等に版權侵害の野望があったというようなものでなく、これら貿易用語・国際用語の載る至便な『日本風土記』をひろめようとの意図が第一に念頭にあった、そう考えたい。

最後に一つだけ付言したいことは、この『日本風土記』の首里語は音韻の点では、まぎれもなく首里語であるが、文法的には九州方言の筑紫・熊本方面を指向していることである。その点では『海東諸国紀』の方がまだ純粹であると言えよう。

阿𪛗𪛗[甜]，伏陀𪛗一潔[湖]
搖格𪛗熱[風好]

の例は一種それなりの規範意識が作用してのことと考えられる。

琉球語の研究には「おもろさうし」などが国の文献資料，中国のそれなどの新しい検討と同時に言語地理学的研究とを結合させるという方法があろうし，課題とすべき方向も複雑で測り知れない深さがあろう。

なお，小論では資料の呈示は実証のための必要最少限にとどめた。資料の検索には京都大学編『日本風土記』に「漢字索引」があり，『室町時代の国語音声の研究』もある。それらの労作にゆだねたい。

(1975年4月9日初稿，1976年11月12日補記)

註

- (1) 昭和36年9月京都大学国文学会発行。
- (2) 昭和38年5月至文堂発行。
昭和47年9月大修館書店刊『講座国語史』第2巻音韻史・文字史の中で外山映次はこの書に多く拠る。
- (3) 昭和32年10月三省堂刊『国語音韻史の研究』。
このほか笠間書院刊馬淵和夫『国語音韻論』（昭和47年1月三版）でも日本語一般の資料としてあつかっている。
- (4) 昭和15年7月発行「国語・国文」第一巻第七号。
- (5) 昭和38年4月発行国立国語研究所編，資料集5。
- (6) 江蘇人民出版社刊。以下『方言概況』と略称する。
- (7) 1968年9月天理時報社刊，河野六郎『朝鮮漢字音

の研究』参照。

(8) 以下，喉頭閉鎖音の記号は一一付さない。

(9) 中国中古音の音韻学的呼称は，前掲『朝鮮漢字音の研究』に拠る。

(10) 昭和47年11月平凡社刊，『沖縄文化論叢』第五巻言語編による。

(11) 大正12年東条操編，『南島方言資料』による。ハングルの転写音は前掲『朝鮮漢字音の研究』による。

(12) 1971年坂井健一編，『明代日本語資料集成』による。寄語漢字の表わすローマ字転写は昭和48年山梨県立女子短大紀要，拙稿「中原音韻の音韻論」による。

(13) 昭和34年岩波書店刊。

(14) 昭和48年吉川弘文館刊，『亀井孝論文集2 日本語系統論のみち』

※ 小論は昭和49年度文部省科学研究費補助金による「近世中国における日本語資料の集収整理と語学的研究」（代表者坂井健一日本大学教授）の一部である。